

社 会 科 教 室

第 165 号

平成 29 年度

香川県小学校教育研究会社会科部会

香川県小学校社会科教育研究会

全国大会の成果を踏まえ実践を積み重ねよう

今日、知識基盤社会の到来と情報通信技術の急速な発展、社会・経済のグローバル化や少子高齢化の進展など、我が国の社会は大きく変化しています。

こうした中、中央教育審議会では平成28年12月に次期学習指導要領の答申がなされ、平成29年3月には、新しい学習指導要領が告示されました。

新学習指導要領の前文には、「一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。(中略) 必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会に開かれた教育課程の実現が重要である。」と述べられています。

そのために、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」という視点を重視し、教科の特質に応じた主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を図ることが重要であるとされています。

さて、平成29年2月9日(木)・10日(金)の2日間、県内外から約1700名の先生方の参加を得て、全小社香川大会が開催され、大成功の内に終わることができました。会場校である高松市立十河小学校、観音寺市立観音寺小学校においては、前述のような国の動向をふまえた先進的な研究発表が行われました。全体指導者である文部科学省初等中等教育局視学官 澤井 陽介 先生からは、香社研及び両会場校の研究に対して、「改訂される社会科が、社会事象の見方・考え方を働かせて社会が分かるようにするとともに、学んだことを生かして社会との関わり方を選択・判断する力を育成することを求めていることと同じ方向である。」「社会科学習の本質を追究しようとする姿勢がうかがわれ、社会事象の見方・考え方を働かせた問題解決的な学習の一層の充実を図ろうとしている改訂の方向と軌を一にするものである。」など、高く評価をいただいたところです。

今年度は、こうした全国大会の成果を広く県下に広め、社会科授業の日常化につないでいくとともに、新学習指導要領に示された方針や内容について、実践事例を積み重ねていく年だと考えます。研究の方向性としては、将来の予測が難しい社会の中でも新しい価値を創造し未来を切り開いていけるよう、現代的な課題に対応する資質・能力を育てる社会科学習のあり方、そして資質・能力の3本柱を育てる社会科学習のあり方について、各都市の特色や独自性を生かしつつ、全県が一体となって研究を進めてまいりたいと存じます。

本県社会科教員も、若手の先生方が増えてまいりました。若手の先生方が、本研究会に参加し、研鑽を積むことは、より良い「明日の授業」づくりや目の前の子どもたちの「確かな学力」を伸ばすことにつながると確信しています。社会科部会(香社研)では、定例研修会、夏季研修会、フィールドワーク、研究フォーラム等を通して、先進的な研究を進め成果を発表するほか、SNSを通じた情報発信にも力を入れていきたいと存じます。会員一人一人の力が皆の力になり、香川の教育を支えていく。そして、香川から全国に発信していくことが本会の使命であると考えています。

本会のさらなる発展のため、各支部の結束力を強め、教育委員会、先輩の先生方のご教示をいただきながら研究活動を進めてまいります。どうぞ1年間、よろしくお願いいたします。

香川県小学校教育研究会社会科部会
香川県小学校社会科研究会
(部) 会長 亀井 伸治

平成 28 年度総括 & 社会科だより

本年度総括 さ・東社研

報告者 東かがわ市立三本松小学校 白澤 一修

研究主題

思考力の育成をめざした学習プランの開発
～板書 ノート指導を核に～

1 研究主題について

本部会は、「思考力・判断力・表現力の育成」という観点から、児童が主体的に協働的に活動できる社会科を目指して取り組んできた。昨今、教師の若年化により、社会科の授業とはどのようにしたらよいのか、何を教えればよいのか等の課題もよく聞かされる。そこでサブテーマに「板書 ノート指導を核に」とし、授業の基礎基本的な課題を研究の柱としてきた。学習内容を共通理解させるための板書やノート指導を行い、問いを調べて得た知識や技能、表現力を使い、社会に発信していくことで社会参画に取り組むこととした。

（本年度の具体的な研究内容）

- (1) 教材開発について（教科書・副教材活用）
- (2) 問いについて主体的に深めることができていたか。
- (3) 思考力の育成と児童の表現活動の関わり（板書やノート指導について）

2 研究の実践

- (1) 第1回研究会 6月16日 会場 東かがわ市立白鳥小学校

- ① 研究授業 5年 単元名「米づくりのさかんな地域」
授業者 東かがわ市立白鳥小学校 教諭 原井 和彦

授業説明

タイ米とコシヒカリを食べ比べすることにより、味の違いだけでなく、値段の違いにも着目させる。そこから単元の学習問題「どうして庄内平野のお米はおいしくて値段が高いのだろう。私たちに届くまでにどんなひみつがあるのかを探ろう。」を設定させた。庄内平野の米作りや香川の米作りについて学習をしていながら米作りの課題を整理してきた。その中で本時は「どうして農業で働く人が減っているのだろう。」の課題を切り口にし、児童の予想と比較させながら考えさせていった。ただ、話合いのさせ方に課題が見られた。

研究討議（KJ法によるグループ討議）

- ア 本時の問いを明確にさせる必要があった。米作りの課題なのか、それとも農業の課題なのか。今回は米作りの課題として捉えるべきであり、後の野菜や果物の学習で農業の課題として農業人口の減少について扱いたい。
- イ 農家の取り組みについてよく学習しているが、マイナス面を強調しすぎないことが大切である。また、活用している資料については教師の補足説明が必要だと思われる。さらに、板書とワークシートをリンクさせれば、よく理解できると思われる。
- ウ 資料を示して根拠を述べられる児童が増えてきている。ただし、資料が問題内容と合致していないところが見られる。板書では児童の調べたことをキーワード化させておくと予想と調べたことを整理するのに役立つと思われる。

- ② 指導 さぬき市立津田小学校 教頭 亀井 健男

- ア 農業の展望として「これからの農業の可能性 白井 真美」の資料より日本人のものづくり精神など農業の未来像について説明させ、食料自給率から食料自給力への理解が大切である。
- イ 本時の問いは1つであるが、そこからどのように発展させるかによって思考が深化していくだろう。
- ウ 児童が資料集や教科書を熱心に見ていた。ただ、読み取りが苦手な児童には感覚や感性だけで考えさせるのも認めていい。そのような活動を通して、農業の明るい未来を子どもたちには考えてもらいたい。
- エ 板書では、今後、思考の可視化ができるようにすることが重要である。カード操作などを取り入れ、板書などを利用しながら思考操作ができるようにみんなで考えていきたい。

- (2) 第2回研究会 7月25日 会場 さぬき市立志度小学校
香小研社会科部会夏季研修会での提案検討会

① 内容

夏季研修会へ向けて提案内容を部員で検討する。江崎教諭の提案内容について共通理解を図り、地域の特色の表作りのワークショップを行った。その後、協力者のワークショップにおける役割分担を確認。

- (3) 第3回研究会 11月4日 会場 さぬき市立石田小学校

① 研究授業 6年 単元名「明治の国づくりを進めた人々」

授業者 さぬき市立石田小学校 教諭 山崎 悠

授業説明

歴史学習を行うに当たり、内容が豊富な割には教科書等の記述が少ない。いきなり時代背景が移動するので教えるのが大変である。そのため、資料集や教科書のまとめ部分を写すだけの児童もいる。そこで、本時では、「まなボード」を活用し相関図を作る作業を通して、グループが必要とする部分を資料からピックアップできたと思う。また、「まなボード」上で話し合うことは議論の足掛かりとなり、指で示しながら議論できている姿が見られて効果的であった。

研究討議

ア 「まなボード」によって意欲が高まり、終盤の議論が活性化するなど主体的な学びが見られた。ただ、始めの段階で何を話し合うのかが見えないグループもいたので、話合いの前に個人の考えをノートに記録しておくことも必要でなかったか。

イ グループでの議論が長すぎた。逆にノートへの記録がほとんど無かった。全体交流の場を設定しその内容を板書などで整理してノートへまとめる作業も必要ではなかっただろうか。観点を絞って全体交流で相違点を話し合い、各グループの意見が黒板上に残しておくことが、今後必要であろう。

ウ 小学校の歴史学習は人物を通して学ぶことが大切である。人物の生き様などをクイズ化し、意欲を継続させることもある。歴史観については先輩の先生から聞くなどして共有することも重要である。

エ 資料活用については、どの資料を一番最初に見せて解決させたい課題を明確にするのかなど、何をj見せてどう問うのかが重要である。また、「まなボード」の弱点は動かしてしまうと過程が消えてしまうことである。消してしまうのではなく修正跡があるように使うことも視野に入れておきたい。さらに矢印の向きや太さでの意思の強弱を表現できるようにすれば活用方法は広がっていくだろう。

② 指導 さぬき市立津田小学校 教頭 亀井 健男

ア 6年生の歴史学習は全体の3分の2を占めている。だから、歴史を学ぶ意味を考えさせ、楽しさ面白さを前面に出させたい。歴史学習には現在にもつながっていることが多くあり、その背景には歴史学習人物の49名と、名は残していないが懸命に生きてきた人たちの生き様があることを学んでほしい。

イ 本時に関して、大久保利通の国造りのビジョンを子どもなりの言葉で書かれていたのはとてもよかった。ただ、「まなボード」の相関図については全てのグループがよく似た構図になっているので、もっと自由な構図でもよかったと思われる。

ウ 幕末の混乱から新政府の確立という複雑で早期に変化していく時代を表現するには難しい点も多いが、教師は児童の意識の変化のいくつかのパターンを予想し、指導案上に記載できるようにしておく。

エ ノートに自分の考えや友だちの考えを書き加え、学び合いの跡が残せるように、しながら「まなボード」と併用することも今後の課題である。

オ 全体交流のさせ方については、各グループの場所に移動し、その場で説明を行う形式も考えられる。

カ 日本は歴史上、外国からの情報が大きな影響を与えたことがいくつもある。木戸孝允の五箇条の御誓文に示されているように外国との交流によっては資本主義や思考の転換などがあり現代にもつながる内容も多い。教材研究に際してはこのような面白さが多くあるので、ぜひ、取り組んでほしい。

本年度総括 小豆社研

報告者 土庄町立土庄小学校 平林泰徳

1 研究主題

社会認識を深め、社会に関わる力を育てる学習

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

社会認識を深め、社会に関わる力を育てるためには、社会に対するものの見方、考え方を身に付けることが不可欠である。そのために学習過程において、問題解決的な学習を設定しなければならない。

その展開の筋道として考えられるのは、

- ① 社会事象に関して事実認識を明確にすること
- ② 事実と事実を関連付けて理解させること
- ③ 社会事象の意味や働きを考えさせること
- ④ 学んだ意識をもとに自分の意思や価値判断を明らかにすること である。

このように、段階を踏むことによって、子どもの意識と思考の流れに沿った学習展開が可能になり、社会認識を育てていく素地が培われていくと考える。さらに、子どもの内面に現れた驚きや戸惑い、葛藤から発生した問題意識をもとに、効果的な資料の提示や調査、インタビューなどの体験的活動、自分で調べたことや考えたことを話し合い、発表する場を設定することによって、追求意識が継続され、社会認識が育ち、社会に関わる力が育っていくと考えられる。

社会認識を深めることについては、地域社会や我が国の社会生活、社会変化とその対応、我が国の歴史や伝統・文化、社会の一員としての参画といった各単元の社会事象について、観点に沿った情報収集や思考操作による整理などが行え、自分なりの言葉で正しく解釈できる力を伸ばしたい。そのために、どのような手だてが有効か探りたい。そして、社会に関わる力としての、地域や我が国に対する誇りや愛情、よりよい社会を持続するために自ら取り組もうとする態度や能力を、どのように育てればよいかを探るようにしたい。

(2) 研究活動

日 時	活 動	内 容
平成28年 4月27日(水)	事業計画	組織づくり・研究テーマ・年間計画立案
6月24日(金)	第1回授業研究	第5学年「日本の農業の未来について考えよう」 授業者 小豆島町立星城小学校 上嶋光晴
7月27日(水)	香小研夏季研修会	第5学年「日本の農業の未来について考えよう」 提案者 小豆島町立安田小学校 林 宗利
11月24日(木)	第2回授業研究	第5学年「地域をつないで見える日本の水産業」 授業者 小豆島町立苗羽小学校 山本祥太
平成29年 2月10日(金)	全小社研究大会	第5学年「日本の農業の未来について考えよう」 授業者 小豆島町立安田小学校 林 宗利

3 研究実践について

(1) 単元構成

	日本の農業の未来について考えよう	地域をつないで見える日本の水産業
課題 をもち・ 見通しを もつ	第1次(3時間) 日本の農業の様子を調べて、学習問題をつくり、学習計画を立てよう。 ◎ 米(田)は、自分たちの生活にとって、なくてはならない本当に大切なものなのかを考えることを通して、学習問題をつくり、学習に見通しをもつ。	第1次(2時間) 日本の水産業について、学習問題をつくり、学習計画を立てよう。 ◎ 食材の産地や主な水産物の漁獲量、主な漁港や漁業などの分布、漁業の現状を地図帳や地球儀、資料から調べ、学習問題や課題をつくる。
調べる・ 考える・ 表現する	第2次(4時間) 山形県庄内平野の米作りに関する取組や食糧生産についての課題を調べよう。 ◎ 教科書を中心に、庄内平野の米づくりについて調べ、ノートにまとめる。	第2次(3時間) 沖合漁業の仕組みや、漁港の役割、生産者から消費者に届くまでの過程を学ぼう。 ◎ 長崎漁港の資料から、沖合漁業の仕組みや漁港の役割、生産者から消費者に届くまでの過程を調べる。

	第3次(5時間) 農家の方の思いや願いから、農業の未来についてまとめ、自分の提言をミニ論文にまとめよう。 ◎ 三角図を用いて小豆島の米づくりを中心に農家の方の米づくりに対する思いを整理し直す。未来の農業について、自分の考えをミニ論文に書く。	第3次(2時間) 遠洋漁業のしくみを学ぼう。 ◎ 焼津漁港の資料から、遠洋漁業の仕組みについて調べる。 第4次(2時間) 「つくり育てる漁業」について学ぼう。 ◎ 青森県の水産業の資料をもとに、養殖漁業や栽培漁業などについて調べる。
つなぐ	第4次(2時間) 学んだ内容をまとめ、家庭、地域、全国に発信しよう。 ◎ 米づくりについて学んできたことをまとめた「ライスブック」を完成させ、今後の農業について提言として発信する。	第5次(5時間) 水産業のアピールポイントをまとめて発信しよう。 ◎ 地元漁協にインタビューし、小豆島や日本の水産業のアピールポイントをリーフレットにまとめる。
	米の消費量が減少し、後継者の育成にも困難をきたし、日本の農業の未来は、暗雲が立ち込める。しかし、日本人は、米とともに生きて来た。そこからわき立つ知恵と英知は、健在である。 小豆島という瀬戸内の小さな島から、日本の農業の未来を展望する取組が息づいている。小豆島をふるさととするわたしたちはその取組をしっかりと受け止め、日本の農業の未来を考えていきたい。	日本の水産業は、後継者の減少や、漁獲量の減少などの課題を抱えている。しかし、日本の様々な地域では、それらの問題を解決するために、地域の特色を生かした工夫をしたり、人々の努力があったりして、私たちの食生活を支えてくれている。 これからの水産業のあり方や水産物との関わりを考えていかなければならない。

(2) 社会認識を深め、社会に関わる力を育てる方策

①「日本の農業の未来について考えよう」

学習問題を設定する段階で、国内の農業の課題を取り上げるとともに、外国と庄内平野、小豆島の水田を比べる。狭く生産量の少ない島の水田が今も必要とされていることに気付かせ、国内と小豆島の米づくりについて調べる意欲化を図る。地元教材として東條地域農業集団と中山千枚田の取組を取り入れる。米づくりには、地域共同体の協力が欠かせないことや、人と人、過去と現在、自然と人間など、さまざまなつながりの輪の中で営まれていることを理解し、収集した情報を、グループ活動を通して再構成しながら思考を深め、表現活動につなげる。学習した農業の特色や農家の工夫・努力などを根拠にしなが我が国の農業（食料生産）の未来について考え、未来志向をベースとしてミニ論文にまとめる。

②「地域をつないで見える日本の水産業」

学習問題を設定する段階で、漁業別の生産量の変化の資料をもとに漁獲量が減少してきたことに気付かせ、国内水産業の現在と未来について調べる意欲化を図る。国内の代表的な漁港の資料から、漁港の役割や主な漁法の仕組み、漁獲物が消費者に届くまでの過程や水産業の課題を調べる。地元漁協へのインタビューをもとに、小豆島と日本の水産業のアピールポイントと今後の自分たちと国内の水産業との関わりを考えて、リーフレットにまとめて発信する。水産業の現状とアピールポイント、今後の関わりを考える折にグループ活動を通して学習した事象を再構成しながら思考を深め、表現活動につなげるようにする。

4 本年度の成果

三角図やカード操作で思考を再構築し発表する活動により、比較や類別といった社会事象の認識を深めるための力を育てることができた。米づくりを、食料生産のための一産業としてだけでなく、昔から大切にしてきた文化としての側面もふまえて学習を展開したことで、今後の活性化を図る上での観点の1つを児童自身がとらえやすくなった。国内と地域に共通する水産業の課題と展望をまとめる中で、商品価値を高めるための関係者の努力に迫ることができた。

5 本年度の課題(来年度の方向性)

「消費者側の意識をもつ生産者の視線」を児童にもたせるには、どのようにするか。社会科学学習の研究内容を、部会から各校全体にどのようにつないで深めていくか。

1 研究主題

どのように学ぶかの資質・能力を高め、社会科の魅力を創る教育

～ 社会に開かれた教育課程による問題解決的実践学習の展開 ～

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題設定の背景

平成27年8月に出された「教育課程企画特別部会 論点整理」では、『何を教えるか』という知識の質や量の改善はもちろんのこと、『どのように学ぶか』という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・対話的で深い学び（いわゆる『アクティブ・ラーニング』）や、そのための指導の方法等を充実させていくことが今後の重要な研究方向性として示された。ここでいう資質・能力とは、他者と協働しながら、新しい価値を創造する力を育成するための教科横断的な汎用的スキルである。教科としての本質である「公民的資質」の育成とどうつなげていくかということも視野に入れて、研究を進めていった。

(2) 高松市小学校社会科研究会の取り組み

本年度は、昨年度までの研究も踏まえながら、これまでの研究を整理するとともに、全国大会へ向けて高松社研全体での研究体制のさらなる確立を図った。そこで、研究テーマを「どのように学ぶかの資質・能力を高め、社会科の魅力を創る教育」、サブテーマを「社会に開かれた教育課程による問題解決的実践学習の展開」と設定し、研究を深めた。教師主導の学習から、子どもの主体性を大切にした学習に転換するために、子どもの既有的知識や経験とつないで単元を貫く学習問題を設定すること、深い問題解決につながる思考操作の場や深まった課題を設定すること、学んだことを発信することで社会参画の素地を養うことなどについて、子どもや地域の実態に応じた研究を進めた。

なお、本年度の主な研究内容は、昨年度から引き続き以下の通りである。

【主な研究内容】

1 社会科の目標、資質・能力、内容についての研究

(1) 指導計画の作成と実践の研究

- ① 単元観 ② 資質・能力、内容・教材の構造 ③ 目標と評価規準
④ 単元構成 ⑤ 学習の構造 ⑥ 本時の学習指導

(2) 授業にともなう研究

- ① 板書 ② ノート ③ 読解力の育成 ④ 学習評価

* なお、学習指導要領改訂にともなう作業の情報（論点整理等）を取り入れて研究を深めていく。

2 カリキュラムマネジメントによる「授業評価演習」を通じた授業改善

定例研授業後の研究討議を「授業評価演習」形式により活性化を図り、全国大会授業分科会協議の在り方を探り、全国大会で実践する。

3 高松市社研・研究紀要（全国大会記念図書）の作成

(3) 研究活動

期日	活動	内容
4月21日（木）	教科主任研修会	本年度の運営、研究、各種事業の計画等
6月9日（木）	市定例研修会①（教科研）	各ブロックで授業研究、研究討議 北（弦打小・庵治小）南（大野小）
7月9日（土）	香社研定例研修会	実践提案（庵治小実践）
7月25日（月）	夏季研修会（市）	全国大会に向けて課題別分科会発表内容検討
7月27日（水）	夏季研修会（県）	分科会Ⅱ提案（大野小・弦打小実践）
11月10日（木）	市定例研修会②（教科研）	各ブロックで授業研究、研究討議 北（鬼無小）南（白山小・氷上小）
2月9日（木）	香川大会1日目 全体会	開会行事・基調提案・記念講演「文科省視学官 澤井陽介先生」・閉会行事（サンポート高松）
2月10日（金）	香川大会2日目 会場校	学年別課題研究会・全体会・基調提案・指導講評 「帝京大学大学院 中田正弘先生」・授業研究会

3 研究実践について

第1回定例研修会（教科研）	平成28年 6月 9日（木）
第2回定例研修会（教科研）	平成28年11月10日（木）
全小社研究大会 香川大会（2日目）	平成29年 2月10日（金） 十河小学校

	授業者	単元名	実践の概要
第一回 教科研	北ブロック 高松市立 弦打小学校 中筋 修	6年 「貴族のくらし」	「できごと」「人物」「文化遺産」の3要素を『文化』でつなぎ、「庶民の営み」という先人の歩みが現代の基礎になっていることを気づかせる、新たな単元構成・教材開発の提案を行った。
	高松市立 庵治小学校 蝶野 祐子	6年 「武士の世の中へ」	御家人と農民の願いを史料から読み取ったり、想像したりして庶民の生活の変化について考えた。農業、文学、遊びの3観点から、庶民の営みに迫り、生活の変化を見出していった。
	南ブロック 高松市立 大野小学校 花房 祐史	3年 「わたしのまち みんなのまち」	「市役所の働き」を新たに組み込んだ単元開発を行った。行政区域を越えた広域の視点から、他地域との関わりも捉え、高松市の一員としての大野地区の在り方を提案した。
第二回 教科研	北ブロック 高松市立 鬼無小学校 中村 祥子	4年 「ごみのしよりと利用」	「市民」「企業」「行政」の3者の立場から、ごみを減らすための工夫について調べた。本時では、ジグソー学習を取り入れることで、主体性と役割意識をもった学び合いを行った。
	南ブロック 三木町立 氷上小学校 造田 和高	4年 「ごみのしよりと利用」	高松市と三木町のごみの処理の違いから、三木町のごみ処理のメリット、デメリットを探った。三木町のごみ処理の仕方について、賛成・反対の立場に分かれ、討論を行った。
	三木町立 白山小学校 岡田 亮	4年 「ごみのしよりと利用」	高松市と三木町のごみの処理の違いから、三木町のごみ処理の特徴を探った。三木町のごみ処理が抱える問題を解決する方法を考え、類別することで3Rの概念を見い出していった。
香川 全小 社研 大会	高松市立 十河小学校	1・2年 生活科3本 3～6年 社会科9本 全学年 十河の香り 活動	研究主題 「十河の香りを育み、未来を拓き社会にでる教育」 社会に拓かれた教育課程「十河小プラン」をつくり、社会的な見方・考え方をもとに思考操作や相互交流を通して思考を深め、主体的に問題解決に向かう授業提案を行った。

4 本年度の成果

- (1) 全国大会に向け、高松市社研の部員が一丸となり、研究・運営に携わった。十河小の授業づくりや会場設営、当日の運営などに多くの部員に関わり、高松社研全体で全国大会を成功させた経験は、今後の高松市社研の研究や取り組みにも生かされるだろう。【全国大会】
- (2) 平成28年度の全国大会へ向けて、高松社研全員の手で研究の歩みを全国大会記念図書としてまとめ、全国に発信することができた。【全国大会記念図書】
- (3) 昨年度より試みた「授業評価演習」は、教科研等で繰り返し実施することで浸透していった。全国大会でも、参観者への説明を丁寧に行い、参観者の協力を得ることで、分科会を活性化することができた。【授業評価演習】

5 本年度の課題（来年度の方向性）

これまでの研究成果および全国大会の成果を来年度にも生かしつつ、新学習指導要領の内容を見据えた授業づくりを行う。各研究会において提案・検討し、新たな教育課程を構築していく。

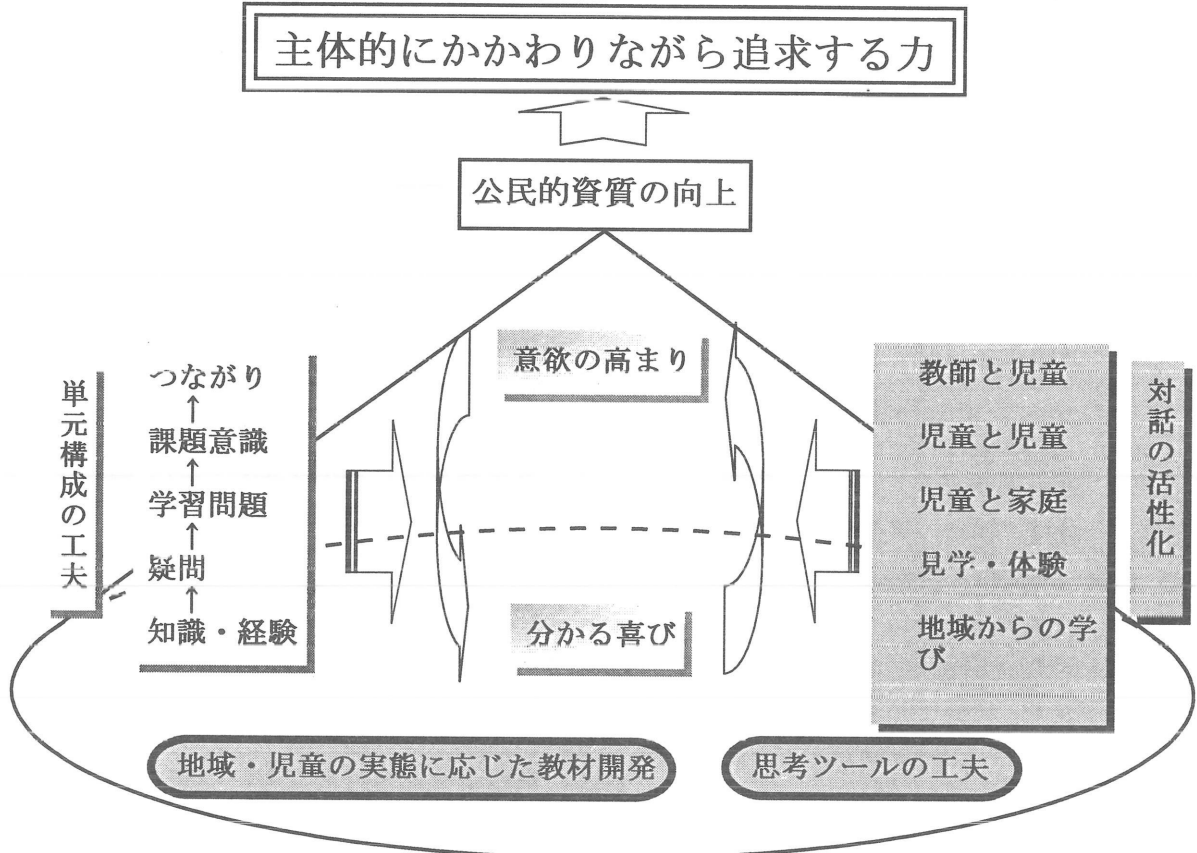
本年度総括 坂出・綾歌社研

報告者 宇多津町立宇多津小学校 河野 富男

1 研究主題

主体的にかかわりながら追求する社会科学習の展開
— 対話の活性化を図る単元構成 —

2 本年度の研究の概要



(1) 研究主題について

昨年度は、「分かる喜びを実感できる社会科学習の展開」をテーマに研究を進め、夏季研究会に向けて思考力育成を中核にして研究を行った。その際、21世紀型能力を参考にし「問題解決力・発見力・創造力」は学習問題設定から問題解決の過程で、「論理力・批判的思考力」は資料を活用した調べや話し合いの過程に、「メタ認知・適応的学習力」は振り返りの過程に関わっていくと考えた。サブテーマを「板書を通して対話の活性化を図る」として、「意欲化」「資料活用による対話」「思考力」「振り返り」の4つの視点を設けて、対話を活性化させる板書計画の在り方について研究してきた。実践に取り組む中で、対話の有効性を実感しつつ、対話の活性化を板書による支援だけとせず、さらに広い研究の必要性を感じるようになった。

そこで、本年度はテーマを「主体的にかかわりながら追求する社会科学習の展開」、サブテーマを「対話の活性化を図る単元構成」と設定した。単元を通して児童の課題意識がつながるように単元構成することで、社会科学習への主体的な態度を育て、児童が教材や人と主体的にかかわり、教師と児童、児童同士の対話をしながら問題解決を図る中で社会認識を深めていくことをねらいとした。

坂・綾社研で目指す児童像 (主体的にかかわる児童を目指す為に)

- 社会的な事象に驚きや疑問を感じ、意欲的に追究することができる児童
- 既習の基礎・基本の事柄や内容を使って、話し合うことができる児童
- 調べたことや話し合ったことを根拠にして、様々な立場から考えをまとめることができる児童
- 問題解決や学び合いの過程を振り返り、生活に関連付けて考えることができる児童

(2) 研究活動

日にち	場所	研修会名	内 容	参加者
3月下旬	坂・坂出小	事前検討会	28年度の役割分担・計画	研究部
4月20日(水)	坂・東部小	坂・綾小研総会	28年度の組織作り	坂・綾全員
5月12日(木)	綾・陶小	坂・綾小研教科研事前検討会	研究授業Ⅰの事前研修会	坂・綾全員
6月1日(水)	綾・陶小	坂・綾小研教科研	研究授業Ⅰ	坂・綾全員
7月16日(土)	綾・陶小	夏季研事前研修会	夏季研事前研全体提案, 分科会提案打ち合わせ	香小研社会科部員
7月26日(火)	附属高松小	夏季研事前研修会	夏季研事前研全体提案, 分科会提案打ち合わせ	坂・綾全員
7月27日(水)	附属高松小	夏季研	夏季研	研究部
10月11日(火)	坂・坂出小	坂・綾小研教科研事前検討会	研究授業Ⅱの事前研修会	坂・綾全員
10月26日(水)	坂・坂出小	坂・綾小研教科研	研究授業Ⅱ	坂・綾全員
1月9日(月)	附属高松小	全小研準備会	全小社研封入作業等	香小研社会科部員
2月6日(月)	十河小・観音寺小	各会場準備会	役割分担・仕事内容打ち合わせ	香小研社会科部員
2月9日(木)	高・わが・高松	全小社全国大会	全小社研全国大会 1 日目	香小研社会科部員
2月10日(金)	高・十河小 観・観音寺小	各会場研究発表会 各会場研究発表会	全小社研全国大会 2 日目 各会場校研究発表会	香小研社会科部員 香小研社会科部員

3 研究実践について

研究授業Ⅰでは、「元寇後、幕府と武士の関係はどうなったのか考えよう」を学習課題とし、当時の武士になりきって、幕府と対話する活動を取り入れた。元寇についての資料が少なく、根拠となる教材開発に苦労させられたが、子どもたちは「ご恩がもらえないのは許せない」、「今回は我慢するしかない」など、いろいろな意見を交流させる中で、元寇により、ご恩と奉公で結びついていた信頼関係が崩れていったことを理解していった。また、単元を通して、ご恩と奉公の結びつきの強さの変化を心情曲線で表現することで、徐々に衰退していった幕府の支配力を視覚的に捉えることができた。

研究授業Ⅱでは、「工場が大切にしていることを順位付けしよう」という学習課題で、思考ツールを取り入れた実践を行った。児童は、ランキングの手法を使い、前時までに調べてきた人気のある製麺所がこだわっていること（「おいしさ」や「安心・安全」等、6つのこと）について、優先順位をつけるための話し合いを行った。ランキングをすることでお互いの思考が見え、他と比較しやすくなり、一人一人が意欲をもって話し合いに参加できた。

4 本年度の成果

(1) 地域・児童の実態に応じた教材開発

当時の武士になりきって、幕府と対話する活動では、学習問題に対して考えを出し合い、交流し合うときに、ご恩と奉公で結びついていた信頼関係を実感させるための資料を行った。資料から、幕府、武士の気持ちを心情曲線で表すことで当時の人々の心づきを実感的に考え、資料を通しての追体験を行うことができた。児童が思考しやすい教材により、自分の考えを友達と吟味したり、検討したりすることができ、当時の時代背景を思考し判断ができるように取り組めた。

(2) 資料活用と思考ツールの工夫

資料の選択、提示の工夫を行った。4年生では、製麺所が大切にしていることを思考ツールを使って優先順位をつけて考えていくことでグループ内の話し合いを活性化させた。次にグループのランキングの発表から、学級全体で重要にしていることを話し合い「なぜ、安全・安心にこだわっているのか」「安くておいしいうどんを食べてもらいたい」等をその根拠を共有しながら対話を進めることができた。

5 本年度の課題（来年度の方向性）

(1) 児童の知識や経験から疑問を引き出し、学習問題を設定したことで単元を通して児童の課題意識からつながった単元を構成できた。このことにより、児童が自ら主体的に学習に取り組むことができたが、一部意識の弱い児童も見られるので全体に広げていく工夫が必要である。

(2) 対話を通して社会的事象の意識を深めるようとした。授業の中で児童同士の対話だけでなく、見学や体験活動での質問や感想をもらう対話、家庭での調べ活動の中でわからないことを尋ねる保護者殿対話等主体的にかかわる場を設定した。今後はこのことが児童の学習にどのように認識されたのか精緻化して分析する必要がある。

本年度総括 丸亀社研

報告者 丸亀市立郡家小学校 櫻井道芳

1 研究主題

自立と共生を育む社会科学学習

2 本年度研究の概要

(1) 研究の方向性

丸亀市小学校教育研究会社会科部会では、生涯を通じて学び続ける力、自分の頭で考える力及び他者との協働の中から新しい価値を見出していく力を付けていくことが小学校段階で望まれると考えた。とりわけ社会科教育においても、社会的事象に関する基礎的な知識や概念、技能を身に付け、自分の考えをもち（自立）、他者との協働を通じてよりよい社会を形成しようとする態度（共生）を身に付けることが大切であると考えた。

「自立」とは、自己形成すなわち自分づくりであり、自分の目標を明確にもち、それに向かって自ら意思決定しながら学習を進めることである。「学習」を個と集団の学び合いとするなら、まず個が課題を追究し、更に協働し、共感的に問題解決をしていくことが重要である。学習活動を通じて自立する力を育むためには、思決定の場を効果的に取り入れることにより、自分のこととして課題をもつことができる。また、十分に社会的事象に対する理解を深め、自ら意思決定することで、自己の問題を再構成する状況が生まれる。さらに意思決定することにより、自分で決定した満足感、新しい知識による再認識に対する充足感を子どもたちは感じるができると考えている。これからの学習指導では、こうした学習経験を重ねることで、子どもたちに自己有用感を育てていくことが必要であると考え。「共生」とは、個と集団の学び合いの中で新しい価値を見付け、社会参画への意欲をもったり、みんなと協力して行動したりすることである。言い換えると、社会や他の人から必要とされていることを感じながら、力を合わせて共に生きていこうとする意思や態度を培うことをめざしていきたいと考えている。

「自立」の過程において、社会認識・知識・概念等、基礎的基本的な事項及び内容を踏まえ、意思決定を行い、さらに、社会の一員としての自覚をもって参画していこうとする「共生」の意識を育てていきたいと考え、研究主題を「自立と共生を育む社会科学学習」とした。

(2) 平成28年度の重点努力事項

自立と共生を育むために ―思考と判断―

- (1) 単元を貫く課題を持たせるための工夫
- (2) 社会的事象の理解を深めるための工夫
- (3) 意思決定する場の設定の工夫
- (4) 社会参画へつながる意欲と態度をもたせるための工夫

(3) 研究活動

日 時	会 場	研 究 内 容
4月13日	飯北小	研究組織づくり、研究主題決定、年間計画作成、夏季研勉強会
6月1日	飯南小	丸小研研究授業 5年「あたたかい土地の暮らし」 授業者 丸亀市立飯山南小学校 教諭 乗松 直樹 指導者 香川大学教育学部附属坂出小学校 藤本 博文 先生
6月25日	岡田コミュニティセンター	定例研修会 5年「わたしたちの生活と工業生産」 提案者 丸亀市立富熊小学校 教諭 眞井 孝征 指導者 野村 一夫 先生
7月7日	城東小	夏季学習指導研究会事前勉強会
7月25日	城西小	夏期学習指導研究会 3年「丸亀城の歴史」4年「『美しい丸亀』のデジタル版の使い方」 5年「SNSの利用」6年「江戸の文化ワークショップ」
7月27日	高松附属小	夏期研修会 5年「あたたかい土地の暮らし」 提案者 丸亀市立飯山南小学校 教諭 乗松 直樹
11月30日	城西小	丸小研研究授業 3年「はたらく人とわたしたちのせいかつ」 授業者 丸亀市立城西小学校 教諭 池田 和樹 指導者 丸亀市立城東小学校 教頭 合田 吉宏
12月15日	城東小	全国大会事前勉強会

3 研究実践について

(1) 研究授業 5年 「あたたかい土地のくらし」

① ねらい

- 日本の地形や気候に特色のある地域に住む人々のくらしを調べることを通して、地形や気候を生かしたり、補ったりする人々の工夫や努力に気付くことができる。
- 他の地域と比較して調べる活動を通して、地形や気候による人々のくらしの違いに気付く、人々のくらしの工夫を「全国きらりマップ」にまとめることができる。

② 学習指導の概要

- ・ 暖かい土地を身近に感じさせるため、常に自地域の教材を活用し、比較しながら学習を進める。本時では、栗熊の菊作りという地域の教材を取り上げる。
- ・ 児童に資料を選択させ、スモールステップで小型ホワイトボードにまとめていくことで対話的・協働的な学びの場を設定する。
- ・ 単元を通して「全国きらりマップをつくろう」というめあてのもとに学習を進めたことで、継課題意識を継続させることができた。



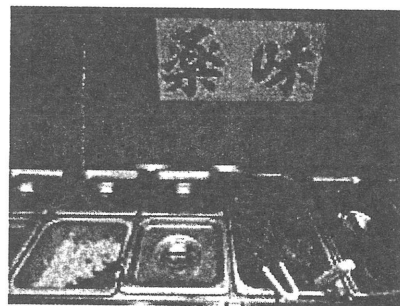
(2) 研究授業 3年 「はたらく人とわたしたちのくらし 農家の仕事」

① ねらい

- 農家の人のねぎ作りの工夫を見つけることを通して、毎日出荷するための農家の人の工夫を考えることができる。

② 学習指導の概要

- ・ 単元の導入では、子どもたちの身近なうどんと、その薬味であるねぎを取り上げることで、児童の興味を喚起した。また、実際に地域の農園に見学に行き、観察したり、農家の方の話を聞いたりする活動を大切に、児童が疑問に思ったことから単元を構成した。
- ・ 単元を通して「ねぎ作りについてお家の人に伝えよう」というめあてのもとに学習を進めた。
- ・ 本時では、ねぎづくりの工夫と1年中出荷できるひみつについて資料から読み取り、小型ホワイトボードにまとめるという活動を取り入れることで、深い学びになった。



4 本年度の成果

- 本年度は、社会科の全国大会が本県で開催されたこともあり、教師が一丸となって教材研究をしたり、提案について話し合ったりして、社会科の教科の大切さや素晴らしさを実感できたのが一番の成果である。
- 本時1時間の授業ではなく、単元を見通して子どもにつけたい力を考えることができるようになってきた。その際、導入での課題のめあてや、小型ホワイトボードを活用した対話的・協働的な学びの場の設定の仕方などを重点に研究を進めてきたことは一定の成果があった。

5 本年度の課題（来年度の方向性）

- 子どもが意欲をもって、主体的に学習に取り組める指導方法は今後も追求していきたい。その際、どこで子どもの思考を深めるのか、その手立てを具体的にどうするのかということを研究し、楽しい社会科の授業を創っていきたい。

本年度総括 三観社研

報告者 三豊市立笠田小学校 篠原 正義

1 研究主題

『今』を見つめ、『未来』を切り拓く社会科学習の創造
－基礎的・基本的内容を身に付け、自ら問いを追究する社会科学習の展開－

2 本年度研究の概要

(1) 研究の方向性

子どもたちの主体的な学習、意欲を深めていく学習、そして探究することに喜びをもつ学習にする授業を構想するにあたって大前提となるものがある。それは、子どもの問いや思考の流れを大切にすることである。

教師は、子どもたちを学習のねらいに迫らせたいがために、目前にある子どもの思考を断ち切って、指導・助言を行うことがある。そうではなくて、常に子どもの思考に寄り添いながら指導法を考えていく必要がある。そのためには、「子どもは本当にそう考えるのか」等々、常に子どもの意識の流れや目前で繰り広げられるであろう子どもたちの学びの様相を想定しながら題材や授業を構想していくのである。「学びは子どものものである」ということを常に意識し、研究の中核となる「問い」と「教材」について考えていく。

① 「切実になる問い」をもつ2つの場面

○ 学習問題成立に向けて生まれる「切実になる問い」

社会的事象に対して、矛盾や驚き等を感じ、「なぜ」「どうして」と問題が意識化され、その問題を解決したいと知的好奇心が喚起される場面。

○ 予想の吟味の中で生まれる「切実になる問い」

問題に対する自分の考えが他者と異なり、「どちらが正しいのか」と葛藤が生じ、それを明らかにしたいという真実を探究しようとする場面。

② 子どもの追究意欲を高めるための教材の開発

○ 教材開発の要件

- ・ **具体性**・・・事實的・個別的なものであったり、直接体験できる（触れられる）ものであったりするという条件を満たしていること。
- ・ **矛盾性**・・・現実の中にある両立しがたい物事や傾向などの関係性を持っていること。
- ・ **周縁性**・・・社会科の教科書などに教材として中心的に扱われている素材ではなく、その周縁部に位置付けられている条件を満たしていること。

○ 学習指導要領、教科書分析を基にした「単元観」の確立

有田氏の対談の言葉にもあるように、その教師の個性あふれる社会科にしていくことが大切である。そのためにも、何をおさえるべきかということ「自分の言葉」で表すことができるまで学習指導要領や教科書を読み込み考え抜かねばならない。

(2) 研究活動

月 日	会 の 名 称	事 項 ・ 内 容	会場 (備考)
4/18 (月)	第 1 回三観社研運営・研究委員会	三観社研の研究・運営についての協議 (テーマ, 組織, 夏季研 等)	三豊市立 詫間小学校
4/27 (水)	三観小研全体研修会	三観小社研の組織・運営について	市民交流センター
5/ 7 (土)	三観社研総会・ 歓送迎会	三観社研の研究・運営についての協議 全国大会に向けて	魚 繁
6/29 (水)	三観小研部員研修会	4 年「水はどこから」 香川やよい (観音寺小)	観音寺小学校
7/25 (月)	三観小研社会科部 夏季研修会	香小研社会科部夏季研修会 三観社研提案 提案者 合田 雅気 (常磐小)	三豊市立 詫間小学校
7/27 (水)	香小研社会科部 夏季研修会	第 3 学年「かわってきた人々の暮らし ～古い 道具とむかしの暮らし～」の実践を通して 提案者 合田 雅気 (常磐小)	附属高松小学校
9/24 (土)	香社研定例会 三観集会	4 年「ごみのしよりと利用」 片山 大輔 (仁尾小) 篠原 正義 (笠田小)	マリンウェーブ
1/14 (土)	三観社研 冬の研修会 新年会	観音寺小学校事前研修会模擬授業 古子 貴将 (観音寺小) 講話 三豊市立詫間小学校 校長 福岡 和信	魚 繁
2/ 9 (木) 2/10 (金)	全小社研香川大会	提案及び公開授業 観音寺市立観音寺小学校 学年別課題研究会 第 3 学年 A 提案者 合田 雅気 (常磐小)	サンポートホール高松 観音寺市立 観音寺小学校
2/23 (木)	みとよ社研編集 三観社研運営委員会	各ブロック理事・運営委員による編集作業 平成 2 9 年度三観社研運営について	観音寺市立 柞田小学校

3 研究実践について

(1) 4 年「水はどこから」の実践より

平成 6 年の渇水では、断水や給水制限により生活が困った事実を学習している。本時は、平成 20 年、自分たちが 2 歳の時にも早明浦ダムの貯水率が 0 % になっていることを知り、「平成 20 年はどんな生活だったのかな」という素朴な疑問をもつ。しかし、断水にもならず、水遊びもできたという事実から、「平成 20 年はどうして断水にならなかったのかな」という本質に向かう問いをもつことができた。子どもたちは、既習の学習や生活経験とつなぎながら、自分の考えを発言し、県や市町の人たちが、計画的、協力的に取り組を行っていることに気付くことができた。

(2) 4 年「ごみのしよりと利用」の実践より

三豊市が平成 2 9 年から稼働する「トンネルコンポスト」を教材化した。現在の燃えるごみはどのように処理されているかを写真を基に予想し、それと「トンネルコンポスト」の写真を比較して、トンネルコンポストは燃えるごみを燃やさずに資源として「生かす」取組であることに気付くことができた。そして、その他のごみもきっと資源として生かしているだろうという予想のもと、次時への課題意識をもつことができた。

4 本年度の成果

今年度は、全小社研の観音寺小学校の研究発表会があり、子どもの意識の流れを大切に「素朴な疑問」から「本質へ向かう問い」の研究の成果を、生き生きと話し合い、活動している子どもたちの姿で見せることができた。

5 本年度の課題 (来年度の方向性)

今年度は、全小社研に向かう 1 年であったので、来年度は、定例会やフォーラムカップに向けて、計画的に、授業者を決め、指導案検討を行い、公開した授業を基に、提案資料を作成するということをしていきたい。

香社研だより 丸亀

〈香社研テーマ〉

「どのように学ぶか」の資質・能力を育て、社会科の魅力を創る学習

〈丸亀社研テーマ〉

自立と共生を育む社会科学学習

6月定例会 丸亀ブロック集会

日時 平成28年6月25日(土) 場所: 岡田コミュニティーセンター

実践提案 第5学年 「わたしたちの生活と工業生産」

提案者 丸亀市立富熊小学校 教諭 眞井 孝征

指導者 野村 一夫 先生

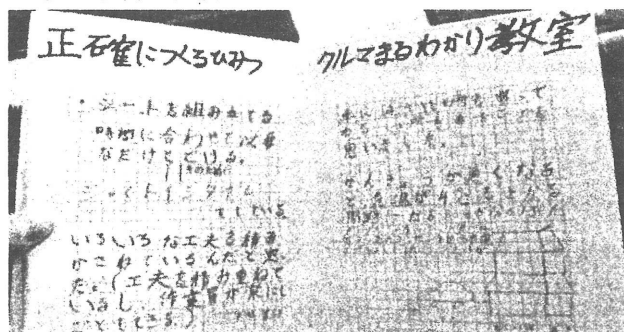
(3) 定例会 5年 「自動車工業」の実践から

① 主張点

- トヨタの『クルマまるわかり教室パソコンゲーム版』(2時間)を行った際、トヨタ自動車の方から「将来のクルマの絵を募集している」ことや「車の開発をする際には、必ず『企画会議を開いて』新しい車を開発し、最低でも4~5年はかかる」という話をうかがった。そこで、児童が大人にねって車に乗り始める『10年後の富熊自動車会社の社員になって企画書を作り、企画会議を開こう』というパフォーマンス課題を持たせることで、将来の社会参画に向けた意欲となるのではないかと。そして、これからの車作りの視点として欠かすことのできない『環境』『安全性』『福祉』の3つからあえて各自1つを選ぶことで、逆に3つの視点がどれも欠かせないことに気づくのではないかと。最後に、ゲストティーチャーのHONDAの販売員の方に最もよかった企画書(MVP)を選んでもらうことで、さらに児童の意欲は高まるのではないかと。
- 本実践は、『自発性』『協働性』『外部との関わり』を意識した。本学級の5年生は、普段の一斉授業では、知識欲が旺盛で発言力のある児童数人によって授業が展開されることが多く、その他大勢の児童がお客さんになってしまっているという実態があった。そこで、お客さん(ただ聞いているだけ)にならないようにするために、①全員が『環境』『安全性』『福祉』の3つから特に大事にしたいことを選び企画書を書く。②(本時)①で書いたことをもとに4~5人のグループを作り、企画書を(郡家小でお借りした)まなボードにまとめた。③ポスターセッション形式で、グループの中で前半と後半に分かれ、前半の説明役は3回(2分30秒×3)行った。3回行ったことで、説明側も徐々に慣れて上手に説明できるようになったし、聞く側は3ヶ所回って聞くことができた。その後3分で修正・加筆を行い、後半の子を交代した。聞く側の約束事として、まず説明を褒めてから質問をすることとした。そうすることで、相手の立場を思いやる発言ができ授業が温かい雰囲気が進むことができた。③『外部との関わり』では、前

述のトヨタ自動車、本田の方にお世話になった。また、日産や三菱などのパンフレットやトヨタの児童向け冊子（一人一冊）、市の図書館から借りた自動車関係の本 10 冊、東京モーターショーの様子、最新の車に関する新聞記事、トヨタやホンダの方に聞いた話、インターネットなど大人でも難しい話（例：2020 年東京オリンピックにおける自動運転、しかし事故が起きたときの責任の所在）も全て児童に知らせたうえで、授業を進めた。

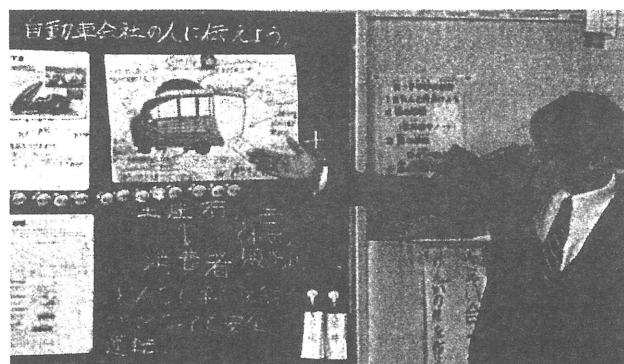
② 学習の実際



企画書を作成するために、自動車づくりについて学習したことを毎時間 1 ページずつノートにまとめていく。



『環境』『安全性』『福祉』の 3 つの視点から 1 つを選んで、各班で理想の車を創造していく。



各班から出された未来の車について、ゲストティーチャーに MVP を選んでもらい、これからの車づくりについて話していただいた。



考えた根拠を明確にしながら、発表し、友達からもらった意見をもとにさらに加筆していく。

③ 討議で出された課題

- まなボードへのまとめ方がグループによって差がある。資料を読み取る力をつけることが大切だと思う。また、グループでの話し合いでは、個人の考えがあっても言えない児童が、よく発言する児童に流されてしまうケースが多い。
- どこまでが現在の技術で、どこからが自分達が考えたものであるのかがはっきりと分かるような書き方の工夫をすることで、視点を明確にしたかった。
- 児童に配布した資料の言葉が難しすぎて、読めない児童もいた。教師の方で資料を加工する必要がある。

香社研だより 高松

<香社研テーマ>

「どのように学ぶか」の資質・能力を育て、社会科の魅力を創る教育

<高松社研テーマ>

「社会に開かれた教育課程による問題解決的実践学習の展開」

7月定例会 高松ブロック集会

日時 平成28年7月9日(土) 於: サンメッセ香川

実践提案 第6学年 「武士の世の中へ」

提案者 高松市立浅野小学校 水口 純 高松市立栗林小学校 仁科 大成

授業者 高松市立庵治小学校 蝶野 祐子

1 提案の主張点

(1) 「できごと」「人物」「文化遺産」の3要素を『文化』でつなぐ

時代の特色を、「庶民の営み」という文化的な視点でつなぐことで、先人の歩みが現在の自分たちの生活や、生き方・考え方、国家・社会の発展の基礎となっていることに気付き、日本人として生きる資質・能力を育てる。

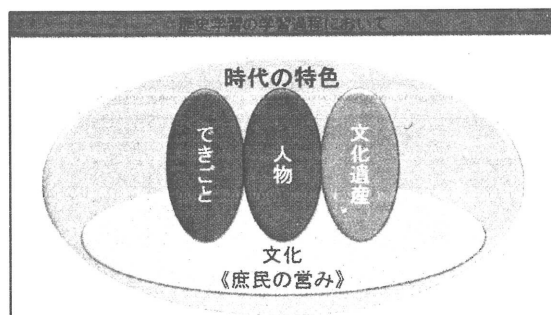
(2) 御家人と農民の願いから考える庶民の生活

農業、文学、学びについて調べたことから、庶民がどのような生活をしていたのかを考える。そうすることで、武士の世の中になって庶民の生活が活気づき、人々が力をつけた時代であることに気づくことができる。

2 提案の背景

歴史を学ぶ意味とは、「自分たちの根底となっているものは何か、また、過去から学んで現在や未来に生かすことは何かを考えること。」と捉える。従来の小学校歴史教育では、「できごと」「人物」「文化遺産」を中心とした学習により、各時代の特色を理解する学習が展開されてきた。この3要素を個別に理解するだけではなく、この3要素をつなぐことで、各時代のもつ特色をより深く理解できると考える。

その方策として、「できごと」「人物」「文化遺産」をつなぐ働きを『文化』に求める。時代の背景を形成するのは、限られた権力者や為政者だけではなく、圧倒的多数の庶民の営みである。文化とは、その土地に生きる人々の知恵、感情、考え方などを基盤にした歴史観であり、その文化を通して見えるものこそがその時代の特色であるとする。「できごと」「人物」「文化遺産」に中心を置きつつも、庶民の営みの視点で考察し、各時代の特色をつかむ学習を展開することで、日本人の生き方・考え方の根底とは何か、日本人として現代・未来を生きる自分たちの生き方・考え方を考える機会としたい。



3 討議内容 授業の流れ

単元	時間	主な学習活動
第1次	1	武士が登場してきたことを知り、武士の世の中に関心をもち、学習問題をたてる
第2次	2	平氏の政治、源平の戦い、鎌倉幕府の仕組みについて調べる。
第3次	3 本時 3 / 3	鎌倉時代の庶民の生活や文化について調べる。 ◎御家人と農民はどのような願いをもっていたのかを調べる。 ◎鎌倉時代の文化や農業から庶民の生活について考え、この先の世の中や庶民生活について、自分の考えを分にとめる。
第4次	1	元軍が攻めてきたことを調べる。
第5次	1	武士の世の中についてまとめる。

本時 学習問題 武士の世の中になって人々の生活はどのように変わってきたのかを考えよう。

- ① 「農業」・「文学」・「遊び」から庶民の生活のようすについて調べる観点を決める。
- ② 資料を選び、分かること、考えたことをノートに書く。
- ③ グループ交流をする。(観点別)
- ④ カードに分かったこと、考えたことを書く。
- ⑤ カードを元にグループ交流をする。(生活班)
- ⑥ 全体交流をする。
- ⑦ まとめ 自分の考えを意見文として書く。



【成果】

- ・子どもたちが操作しやすいように、カードの色や書き方を工夫していた。
- ・班での話し合いでは、子どもたちから様々な視点が出て、多様な話し合いができていた。
- ・カード操作による分類を行うことで、友だちの違った意見が視覚的に分かりやすく、そこから深い話し合いにつながっていた。
- ・「御家人による庶民への気配りが見えた。」など、御家人と庶民の関係について、教師の予想を超えた子どもたちの思考がカードに表出していた。

【課題】

- ・「農業」「文学」「遊び」で色分けしたカードを分類した後、まとまりごとで色に注目させることで3つの視点が生活の変化に関わっていることを気づかせたかった。
- ・子どもたちが発表する際には、提示している資料を説明に活用できると、根拠を明らかにした発表になった。
- ・歴史事象の「原因」と「変化」が、子どもたちの中ではっきりと理解できないまま、分類されていた。
- ・まとめの際に、「明るい・楽しい」ではなく、社会的な用語に置き換えて、表現できれば時代の特色に迫れたのではないかな。
- ・文化だけの学習にならないよう、時代の中での庶民の位置づけを意識したまとめになればよかった。

4 ご指導 香川県教育委員会事務局 義務教育課 主任指導主事 山内 秀則先生

- ・「目的(何のために)」「内容(何を)」「方法(どのように)」学ぶかについて、市社研の研究提案をもとに提案者、授業者が具体的な実践事例を示してくれた。提案から授業まで、研究の一貫性が見られた。
- ・カード操作により、高次で抽象的な概念を獲得していく場合、その概念に具体的な事実がどれだけぶら下がっているかが重要である。具体から「つまり」を問うことで抽象へ、抽象から「例えば」を問うことで具体へ。この往還により、概念を形成することができる。

編集後記(香社研事務局)

歴史学習において、「できごと」「人物」「文化遺産」を「文化(庶民の営み)」でつなぎ、時代の特色を見出すという提案性のある実践報告であった。フロアの先生方の熱い協議、発表が印象的であった。

香社研だより 三・観

香社研テーマ

「どのように学ぶか」の資質・能力を育て、社会科の魅力を創る学習

三観社研テーマ

『今』を見つめ、『未来』を拓く社会科学習の創造
～主体的な追及によって社会的な見方・考え方を育てる授業づくり～

9月定例会 三観ブロック集会

日時 平成28年9月24日(土) 於: マリンウェーブ

実践提案 第4学年「ごみのしゅりと利用」

授業者 三豊市立仁尾小学校 教諭 片山 大輔

提案者 三豊市立笠田小学校 教諭 篠原 正議

1 提案の主張点

(1) 実践提案①(三豊市立笠田小学校 教諭 篠原 正議)

① 主張点

平成29年度から三豊市で導入される、日本初「燃えるごみ処理施設『トンネルコンポスト』方式」を効果的に活用するためには、どのような単元構成、授業の展開を行えばよいか?

② ごみ問題の解決に向けて

- ・ 三豊市はごみをゼロにする→「ごみはすべて資源」→トンネルコンポスト方式
- ・ トンネルコンポスト方式では、ごみを燃やさない、埋めない。→ 単元観「ごみを生かす」

③ トンネルコンポストを活用した単元構成

- ・ 第1次でトンネルコンポスト方式を扱う。本単元では、第1次で燃えるごみの処理の仕方を予想して、トンネルコンポストと比較することで、「ごみを生かす」という視点をもたせる。
- ・ 「他のごみはどのように生かしているのか?」という問いをもたせて、展開していく。

④ 単元を貫く学習問題の設定

一般的な清掃工場は、「ごみは燃やして、埋める」であるが、今からの三豊市は「ごみは燃やさない、活用する」である。この矛盾性のある教材を比較することで、単元を貫く学習問題「収集されたごみを生かすため、どのようにして処理されているか調べよう。」を設定する。

(2) 実践提案②(三豊市立仁尾小学校 教諭 片山 大輔)

ごみを生かすという視点で授業をした。

① 学習活動1

児童に、ごみは自分の家に置いておきたくないという意識をもたせるために、燃えるごみに視点を当てた。生ごみを見せて、「このごみは本当に燃えるのか。」と問いかけ、学習問題「燃えるごみはどのように処理されるのだろう。」を設定した。

② 学習活動2

写真を並び替えて、燃えるごみの処理のされ方を予想し、燃えるごみのストーリーを作っていた。話し合いの中で、児童の意識は「燃やして埋めるのだろう。」という考えになっていた。しかし、燃やして埋めると体に悪そうだ、という考えが出た。そこで、来年から燃えるごみの行き先が変わることを教えた。

③ 学習活動3

写真を見て、建物の外部から現行の処理施設と平成29年度からの処理施設を比較した。そして、煙突に着目させることで、「ごみは燃やす」から「ごみを燃やしていない」ことに気づかせた。さらに、「生かす」という視点をもたせるために、固形燃料の実物を見せ、気づいたことを話し合わせた。

④ 学習活動4

今まではごみは燃やしていたが、これからは、ごみは燃やさない、生かすことをおさえた。この学習から、他のごみはどう生かされているのかな、という意識にできた。

3 討議

トンネルコンポストをどのように活用すれば、ごみの処理と利用を教えられるのか。

(1) 質疑応答 (質問は㊦, 応答は㊧)

- ㊦ トンネルコンポストの設置の背景は何か。誰が、どのような思いで設置しようとしたのか。
- ㊧ 三豊市にはもともと焼却施設があった。その施設の閉鎖に伴い、現在は丸亀市へ三豊市の燃えるごみを持って行っている。自分たちでどうにかして処理しよう。
- ㊦ どのように単元計画をつくっていったのか。
- ㊧ 本時では、燃えるごみはこれから役立つものになることが分かった。これからどんなことを勉強していきたいのか、と問いかけ、燃えないごみはどう処理されるのだろうか調べていたり、三豊市のごみの量の変化を表したグラフを提示し、なぜごみが減ったのか考えさせたりしていった。
- ㊦ トンネルコンポストは強引だと感じた。社会のごみ問題をとらえて、このままではいけないのか、どうやったらごみを減らせるのかとなっていけば、ごみを生かすことが強くなるだろう。燃えるごみの処理の仕方の予想とトンネルコンポストでの処理の仕方の事実を比較するのは無理がある。
- ㊧ 生かすという視点を早めにもってくることで、最後に分別意識が高まると考えた。

(2) ワークショップ

トンネルコンポストをどこに位置づけると単元構成ができるのか。

- ・ 三豊市の現状の理解をして、トンネルコンポストを登場させる。そして、三豊市の計画やトンネルコンポストのメリットだけでなく、デメリットも扱う。そうでなければ、ごみを出しても良いと思ってしまうのではないか。
- ・ 下記のような単元構成をしたい。第1次：子どもの目の前からごみが消える事実、第2次：ごみの処理の調べ（どこで、誰が、どのように）、第3次：今までの処理ではいつか限界が来るという事実（ここでトンネルコンポストが登場）、第4次：自分たちでごみを減らす意識を育てる。
- ・ 単元の学習問題は「収集されたごみを生かすため、どのようにして処理されているか調べよう。」では、処理中心になってしまうのではないか。ここは、「ゴミを0に近づけるために…」として、処理に加えて、「自分たちは」という視点を入れるべきだ。
- ・ 「誰が」の視点が必要だ。例：誰が置くのか、誰が集めるのか。
- ・ 「生かす」視点は、単元の見通しになる。疑問→問い→予想→計画
- ・ 単元の第1次に必要な要件とは、動機づけと方向づけだ。

4 指導 (西部教育事務所 主任指導主事 林 聖士)

(1) 社会認識の明確化

- ・ ごみを見る目が「ごみは生かせる」となれる。
- ・ 単元構成の最後で、自分はこうしたいという意見が出てきたら良い。
- ・ ごみの負のイメージから「ごみは生かせる」ことが分かれば、自分はこうしたいと考えるようになる。
- ・ 子どもたち自身が課題を見つけられた。燃やすべきごみが燃やさないで処理できるトンネルコンポストを学んで、他のごみはどうなの、と考えられた。

(2) 若い先生へ

- ・ 授業づくりの基本は、①学習指導要領の分析、②教科書の分析、③教材研究である。
- ・ 先生の価値の押し付けにならないように注意してほしい。
- ・ 子どもたちを乗せることだけに目が向いていないだろうか、その後に何が残ったのかが大事だ。

香社研だより 坂・綾社研

<香社研テーマ>

自ら社会に参画する資質・能力を高め、社会科の魅力を創る学習

<坂出・綾歌社研テーマ>

主体的にかかわりながら追究する社会科学習の展開

—対話の活性化を図る単元構想の工夫—

11月定例会 坂出・綾歌支部

日時 平成28年10月3日(土) 於:宇多津町立宇多津小学校

実践提案 第4学年 郷土の発展に尽くす

「久米栄左衛門と坂出・宇多津の塩田」

提案者 宇多津町立宇多津小学校 教諭 高野 雅信先生

1 提案の主張点

(1) 子どもの意識の流れを大切にして単元計画を考えたり学習問題を設定したりする。

本単元を学習するにあたり、教材研究をしながら子どもたちから出る疑問を予想しておおよその単元計画を考えてはいたが、学習が始まると2つの学習問題が新たに加わった。それが「塩田は何をする所だったのだろう」と「久米栄左衛門は、本当に塩田をつくると言ったのだろうか」である。塩田の役割や仕組みについて学ぶことにより、子どもたちは、塩田は塩を作る場所というだけでなく、多くの働き手が集まる場所ということを知り、「坂出に塩田をつくれれば、他の町に仕事に行った若い人たちを呼び戻すことができる。」ということに気付くことができた。また、久米栄左衛門は塩田をつくることに自信がなかったと考えていた子どもたちも、資料との出会いを通して久米栄左衛門の塩田開拓に懸ける強い思いを感じ取ることができた。

(2) 協働して問題を解決し学びを深めていく。

はじめに単元図からこれまでの学びを振り返り、「今日は〇〇さんたちの疑問を全員で解決していくよ。」と声をかけ、その時間に解決する学習問題を確認してから授業を進めた。問題を解決するために必要な資料を配布した後、資料の内容や資料を読んで気付いたことや思ったことを二人組になって交流する時間を毎時間とった。二人組交流を通して友達の考えと出会い、自分の考えと同じ所や違う所に気付き、そして全体での話し合いで考えを深めていく、そのような学習展開を目指した。二人組交流では、「〇〇さんの意見の意味分かった。」とつぶやく子や、相手の意見をノートに書く子もいた。全体での話し合いの時も、「豊かな生活」や「未来」等の今後の学習につながるような言葉が出てくると、その都度二人組交流を行い、言葉に籠められている思いや願いを話し合った。子どもたちは意欲的に意見を伝え合っており、協働して問題を解決しようとする姿勢がうかがえた。また、座席表や前時のノートに戻り、これまでの学びをいかして問題を解決しようとする子も授業が進むにつれて増えていった。

(3) 座席表を児童理解に役立てる。

ノートやワークシートに子どもたちが記したことを毎時間座席表に記録することにより、子ども一人ひとりの学びを知ることができた。また、誰の気づきを、いつ、どのタイミングで出せば学びが深まるか、子どもに新たな気づきを促すことができるか考えることで、子ども一人ひとりの意見に真剣に向き合っていこうという意識を持つことができた。

ほとんどの子どもは、授業を通して「人々の暮らしを豊かにしたい」という久米栄左衛門の願いに迫ることができたが、久米栄左衛門の存在の大きさに気付いたのは、抽出児として変容を追っていたAであった。それは、座席表にある「久米栄左衛門さんがいてくれたから、坂出の人たちはゆたかにくらせるようになったのだと思った。」というAの言葉からうかがい知ることができる。何気ない会話も一緒に遊ぶことも、何も構えることもなく接してくれる友達を欲しているAだからこそ、「人の存在そのもの」に注目できたのだろう。

2 討議内容

○増井先生（郡家小）座席表の活用についてはどのように取り扱ったのか

- ・毎時間、子どものノートを見て同じ意見、違う意見を見取りながら活用していった。

○白澤先生（三本松小）

東かがわ市では、栄左衛門の鉄砲祭りがある。単元計画の立て方や学習問題はどのように出てきたの

- ・事前に子ども達と話し合って授業を進めていった。当然、軌道修正も行われた。

○梅本先生（さぬき北小）座席表の有効性と短所について。資料をすごく使われているがイラスト等副読本から使われているのか。

- ・座席表は教師と子どもの意識のずれが見られることがあった。資料は坂出の鎌田博物館、商工会議所のDVDや物語「久米栄左衛門」等から活用した。

- ・（坂出小・岡本先生）先輩の残された副読本等の資料が坂出小に残っているので活用している。濱引きの人形等が残されている。

○青木先生（高松第一小）本時、久米栄左衛門と地域の人々の思いを取り入れて実践していったらどうか。7時間目で地域のことを考えての実践し町がよくなる思いが出てくるのでは。私は琴電の授業から取り入れてみた。

- ・両方の思いが出てきて未来志向の考えが出てくるので検討していきたい。

3 ご指導

まんのう町立満濃南小学校教頭 佐柳 仁先生

○郷土の偉人を取り上げるためにたくさんの資料収集を行い授業で実践できているのはすばらしい。

○単元全体の構成をしていくときに教師側からの資料提示であったので、子どもと一緒に地域の図書館で調べたり、子どもの思いを取り入れていくとより実践内容が深まってくる。

坂出市郷土編纂所所長 唐木 裕志先生

○坂出と宇多津は昔からの地域の独自性もあるので、それぞれの地域の思いを取り入れて実践していく必要がある。

○先輩らが残された授業実践も多いので伝統を脈々と受け継ぎ新しい単元や授業開発も行っていきたい。

香社研だより 仲・善

〈香社研テーマ〉

「どのように学ぶか」の資質・能力を育て、社会科の魅力を創る学習

〈仲善社研テーマ〉

人間の営みに学び、広い視野を育てる社会科学学習の展開

10月定例会 仲善ブロック集会

日時 平成28年10月15日（土）於：善通寺市立竜川小学校

実践提案 第5学年 これからの食糧生産とわたしたち

授業者 善通寺市立竜川小学校 河村 高志

1 提案の主張点

（1）予想に基づきグループに分かれて話し合うことで問題点を焦点化し、深く考えることができる。

社会科において基本となることは、児童がそれぞれ自分の予想を持ち、その予想が本当に正しいのかを資料を用いて検証することである。本単元では、アメリカ産の牛肉が輸入停止となったとき日本では牛肉不足をどのように解決したのかを予想する。児童は「米作りのさかんな地域」の学習や「水産業のさかんな地域」の学習での経験や牛肉の輸入量の資料から、牛肉不足の解決方法として、「アメリカ以外の国から輸入する」、「日本で生産する量を増やす」、「アメリカからの輸入を再開する」の3つの予想を考えるであろう。この3つの予想はどれも牛肉不足の問題を解決するために有効な方法であるが、1人で3つの方策が予想通り行われているかを検証することは1時間では、難しいと考える。

そこで、本実践では、予想を基に児童を3つのグループに分け、それぞれのグループで、資料を基に、予想を検証し、他のグループの児童と相互に交流を行う。これによって牛肉不足を解決する方法について、様々な視点から深く話し合うことができると考える。

（2）グループで情報機器や教具を活用する場を設定することで学び合いのある学習ができる。

自分が立てた予想と似た予想を考えた児童で集まってグループを作ることによって共通の考えで話し合いをすることができる。話し合いの結果を他の予想を考えた友達に発表する時間を設定し、発表のためにホワイトボードを活用する。ホワイトボードを活用することで、限られた文章で、友達に分かりやすく説明できるよう記述する必要性が生まれ、そのためにどうすれば良いかをグループ内で話し合うことができるようになると思う。

また、発表時には、タブレット端末を活用し、ホワイトボードの文字を拡大して提示する。これによって友達の考えが分かりやすくなるだけでなく、一人ひとりが役割を持って活動することができ、話し合いへ参加する意欲を高めることができると考える。

2 討議内容

- 写真資料を用いて資料の数も精選する事で、一つの資料を深く読み取ることができ、読み取った事を自分の言葉で表現することができた。
- タブレットを活用することで、時間を短縮し、分かりやすい発表をすることができた。
- シンプルで分かりやすい授業を行うことができていた。話し合いの中で日本の BSE 発生に目を向ける児童がいたり日本の取り組みはどうか？と気になった児童がいたりしたので、それを考えるのも良かったのではないかな。
- グラフから他国との関係を考えさせられるようにするためには、必要な部分を赤で囲むなどすれば問題が焦点化され、考える糸口になったのではないかな。
- ビデオを見せた後の発問が「こんな牛を食べたい？」であったが児童の思いはかわいそうという気持ちであった。でも、人々が牛肉を食べたくなかったのは、インタビューから自分や家族への健康被害を危惧していたことだと分かる。この点が児童に伝わるようにすることで本時の問題に近づけることができるのではないかな。
- 本時は、牛肉を取り上げ、牛肉問題は解決することができたと思いが、他の食べ物も同様な方法で問題を解決していると気づけるような資料や考える時間があればよかったのではないかな。

3 ご指導

香川県教育委員会事務局 義務教育課 主任指導主事 山内 秀則先生

- ・ 本実践で用いた教材の切り口が良かった。最近ブラックボックスが多い社会。自分の生活に影響が出たときにはすでに遅い世の中だが、その自分たちに来る前にいろいろな人が手を打ってなんとかしている。しかし、BSE はそれが間に合わなかった事件であった。この事件を取り上げ考えることで、世の中の仕組みについて考えることができる良い教材だったのではないかな。
- ・ 本実践では、「こうなったのはどうしてだろう？」というように考えたが、「この問題をみんなだったらどうする？」と考えると良いのではないかな？例えば輸入を再開するために厳しく検査を行うと言ってもアメリカは嫌がった事実がある。また、3つの国が助け合って問題解決がなされたまとめているがそれは本当だろうか？どこで立ち止まって本当にそうかどうか？を考える事が大切であると考えられる。
- ・ しかし、そのような視点で一つひとつの項目を順番に調べていくのは難しい。そこで、例えば、消えた75万トンはどうするかを自分だったらどうすると考えると良いのではないかな？その時日本はこうしたのではないかな？と考えると良いのではないかな。
- ・ 児童がブレーキを掛けたときにそれを喜べる、予想外の反応が出ることを楽しめる余裕があるとよりよい授業ができるのではないかな。

平成29年度 研究主題・運営方針等

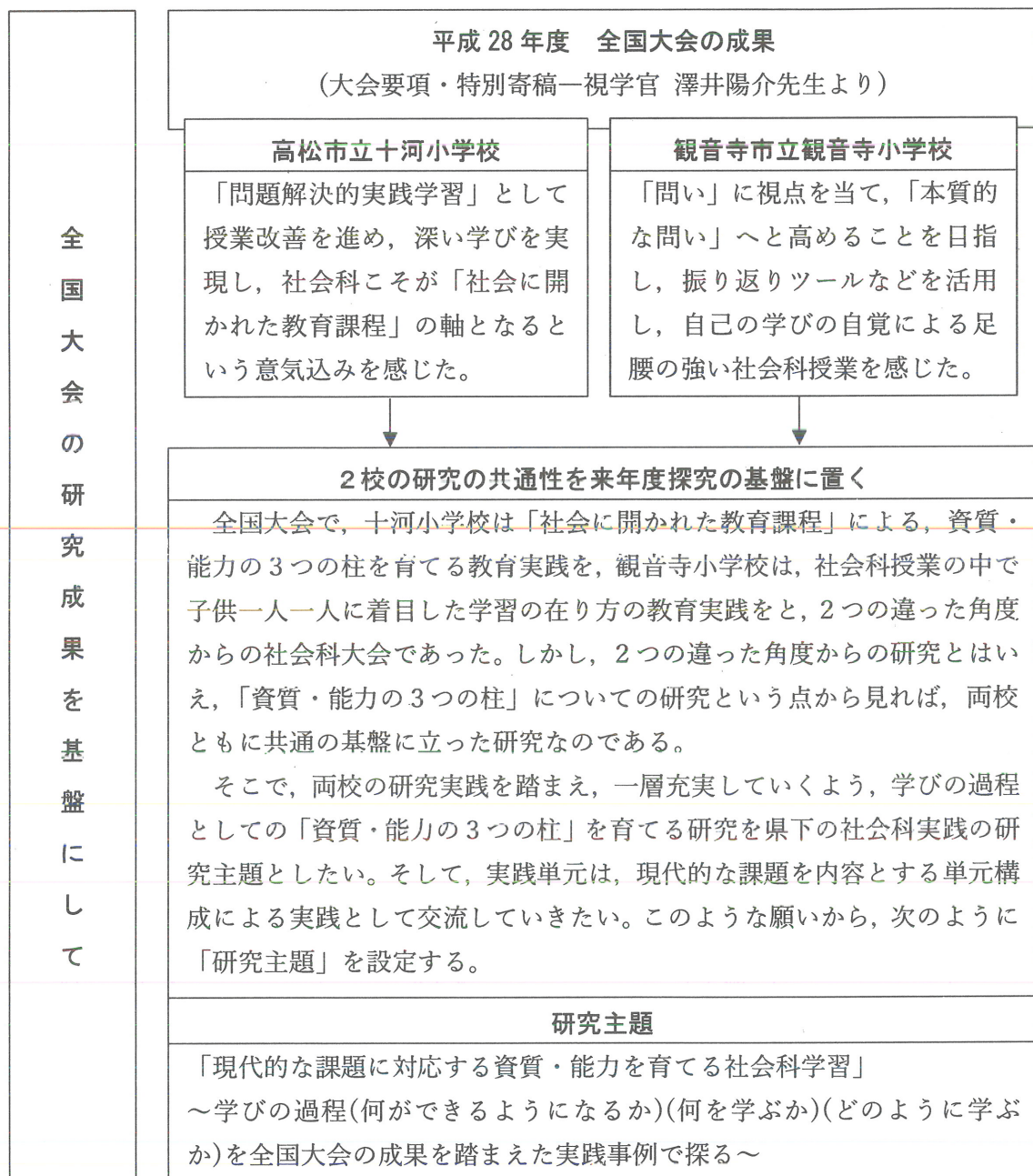
平成 29 年度 香社研「研究主題」について

1 研究主題

「現代的な課題に対応する資質・能力を育てる社会科学習」

～学びの過程(何ができるようになるか)(何を学ぶか)(どのように学ぶか)を全国大会の成果を踏まえた実践事例で探る～

2 研究主題探究の構想と今後の研究の方向付け(新学習指導要領による)



※主テーマは共通にし、サブテーマは各郡市が設定し、夏季研で実践・提案の交流を行う。



